

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

ENDINGプラン

美川中学校三年

小川 おがわ

礼愛 れな

君は最期、どんな死に方が良いだろう。俺は本当に今の今までそんなことを考えたことはなかった。しかし、俺は今色々なことを決断しなければならぬ。いわば、人生最大の岐路に立たされている。

五年前、俺はある名もない企業に就職した。もともとあまり利口な方ではなかったため、会社が決まらず、たどりついた先がそこだったのだ。やっとならなくなった仕事で、自分の力でお金をかせげることがうれしくてたまらなかつた。しかし、その喜びもすぐに砕け散った。なぜなら、そこは予想もしないほどのブラック企業だったからだ。それでも俺はこの五年間必死になって働いてきた。友達と遊びもせず、なんなら、一週間会社に泊まり込みで働いたときもあった。毎日デスクワークの日々。でも、俺は社内では評判が良かった。だから、もつと成果を上げれば、昇格できるかもなどと小さな希望をもっていた。しかし、どれだけ働いても、昇格どころか、給料さえも上がらなかった。そして、二週間前俺は会社で急に倒れた。いや、実は急ではなかった。ずいぶん前から、体に不調を感じていたのだ。でも、病院に行く時間すらなかったので、そのうち治るだろうと思いついておいた。しかし、その結果がこれだ。病院へ運ばれ、そのまま入院し、検査の結果は「癌」だ。はじめそう聞いた時は、自分のことではないのではないかと思った。さらに調べた末、それは俺の全身を侵して、もう先は長くないそうだ。それならもつと早く病院へ行っておけばよかつたと思つた。俺に残された時間はあと八ヶ月だ。あと八ヶ月俺は何をしよう。俺は初めから決めていたことが一つだけある。

「治療はしません。」

俺は医者にこう言った。どうせ命が少しだけ延びるだけだ。俺はそんなことより、最期は楽しく生き抜きたいとずつと心に決めていたのだ。なぜなら、俺の祖母の延命治療を見てきたからだ。祖母はとても苦しうにしていた。今でも自分がそれをすると思うとゾツとするほど苦しうだったのだ。

とりあえず、これから一週間は入院することになった。この際仕事もきっぱりやめてしまった。これからはある程度学生時代から貯めてきたお金や、十年ほど前に死んだ親からの財産を少しずつ切りくずして八ヶ月を過ごそうと思う。

これから俺の最期に向けての計画、名付けて「ENDINGプラン」がはじまる。

「まずは新居だよな。今の家ではもしもの事があっても誰も助けくれないしな。」

そう言いながら病室でパソコンをさわると、あるサイトが目に入った。それは、シェアハウスのサイトだった。シェアハウスだったらもしものことがあっても誰かがいるし、家賃も安くなるだろうと思う。俺は友達が少ないため、良い機会だと思ひ、そのサイトをひらいた。色々な物件があつたが、その中でも一番目をひかれたものがあつた。それは、一見古い家だが、中はリフォームされていて、とても美しい家だ。ここにしようと思つた。しかし、入院していると、一週間がとてつもない。働いているときは、何もなただ忙しい日々が続いて、一週間なんて一瞬だったのだ。この一週間何をしようかと考えている。俺はふとこれからあと少しの人生は、誰かの役に立ちたいと思つた。ENDINGプランの題材はこれにしようと思つた。しかし、何をして役に立つかは、これから考えなければならぬ。とりあえず外へ出てみようと思ひ立ち、病室から出る。この病院にはテラスがあり、そこは立入自由だと聞いているので、そこへ行くことにする。そこは、花があつたり、木があつたりと、とてもきれいな場所だった。病室だと分かつてから一気に疲れやすくなつていたため、すぐ近くの女の子が座るベンチに俺も座る。すると、女の子が、

「おじさん、こんにちは。少しありさとお話ししてよ。」

と言つた。俺は子供が嫌いではなかつたので、

「いいよ。」

と笑顔で言った。こうしてみると、とても久しぶりに笑った気がする。その女の子はありさという名前らしい。

「お兄さん、お名前は？」

「奏馬っていうんだ。旭奏馬。」

「へえ。奏馬お兄さんは何で入院しているの？」

とつきに、何と言えば良いかが分からなくて、少しドキッとした。でも、「重い病気になっちゃったんだ。」

となるべく明るく言った。

「そっか。ありさと同じだ。ありさもね、もう一年とちょっと病院にいるんだよ。」

少し悲しそうにそう言ったので、勇気づけてあげようと思ひ、

「大丈夫。きっともうすぐ元気になるよ。」

と言った。ありさちゃんも明るく、

「そうだよ。ありさ、良い子にしてるもんね。」

と言った。だから、

「そうだよ。良い子にしてたら、病気なんてすぐに良くなるよ。」

と言った。本当にそうだろうか。自分に問いかけたが、うまく答えが出せなかった。それからテラスへ行きたびにありさちゃんと話しをした。

子供と話すのがこんなに楽しいなんて思ってもみなかった。出会えたことをうれしく思った。

やっと一週間が経ち、シェアハウスの話もいよいよ現実味を帯びてきた。病院を出たら、すぐに引越しの準備をする。三日かかってやっと整理できた。こうしてみると、俺の部屋はとて広く感じられた。そして、今日はルームメイトとの顔合わせの日だ。あらかじめ、病気であることは伝えてあり、その上で快く受け入れてもらった。ルームメイトは男三人だ。今日は近くの喫茶店で待ち合わせということになっている。お店に入るとすぐ、不動産屋さんが待っていてくれた。そのまま店の奥まで行くとルームメイトだと思われる人たちが笑顔で手をふってくれて

いた。三人ともとてもフレンドリーで、関わりやすい人達だった。そして、自己紹介が始まった。まず一人目、見た目は黒髪で、少しやせている、二十代後半でイケメン風のんだ。

「俺の名前は、佐久間あきらで、一応シェアハウスの創設者。職業は建築家。好きな食べ物チョコレート、好きな音楽は洋楽かな。みんなで助け合ってるし、みんな優しいから、気をつかわずに何でも頼ってね。よろしく。」

「よろしくお願ひします。」

拍手が起きた。本当にみんな話しやすそう良かった。そして、二人目、見た目は少し小柄で、大きめの眼鏡が印象的な二十代前半の若さあふれるんだ。

「えっと、名前は神崎圭斗で、みんなからはけいちゃんって呼ばれてます。最年少で、大学生、二十一歳です。好きな食べ物はみかんで、本が好きです。人と話すのは苦手だけど、仲良くなりたいので、どんどん話しかけてください。あと、何かあったら、役に立たないかもしれないけど頼ってくれるとうれしいです。」

「おう！けいちゃんはいつもかわいこと言うね。」

とあきらさんが言った。自信なさげだが、仲良くなりたいたいと思っていてくれていることがうれしかった。次の三人目は、少し身長が高めで、とても整った顔立ちで、上品なイメージのんだ。

「井上椿です。よく名前が女性と間違えられるけど、この通り男だよ。年は二十八歳、あきらくんより二つ年上かな。好きな食べ物はヨーグルトで、趣味はギター。職業はホテルのフロントスタッフだよ。仲良くしてね。あと、俺のこととどんどん頼ってくれるとうれしいな。よろしくね。」

とても紳士的にかっこいいと思った。最後は俺の番だ。

「ええ。旭奏馬です。今は仕事をやめてしまいました。好きな食べ物は貝の方のかきですが、今はもう食べられません。趣味はないので、これからつくってみたいです。一応二十七歳です。今回は俺みたいなすっか

らかんの人間を受け入れてくださり、ありがとうございます。基本暇なので、家事はできる限り負担します。みなさん、とても話しやすそうので安心しました。これから八ヶ月という短い期間ですが、よろしくお願ひします。」

「よろしく。」

と全員から言われ、安心した。これから不動産屋さんには帰っていただき、部屋を見に行く。電車に乗って十五分ほどし、降りてからしばらく歩くと、あきらさんが立ち止まって言った。

「着いたよ。ここがこれから君の家になる場所だよ。」

ネットで見たとおりに、そこは外側は古いが、家の中は一面真っ白で、美しい日の光が差し込む良い家だった。俺の部屋は二階の樫さんの隣の部屋だ。まだ何も置かれていないが、月がよく見えるというこの部屋を俺はとても気に入った。そして、家事や、ルールの説明を聞いた。家事は日替わりで、樫さんは仕事上どうしても土日祝日は入れられないので、そこは他の人達で協力し、月曜はあきらさん、火曜日は俺、水曜日は圭斗くん、木曜日は樫さん、金曜日は週替わりという役割分担だ。

そして、この家のルールは、週に三食は全員集まって食事をする。できるだけ敬語は使わない。みんなで呼び名を決める。何かあったらみんなで助け合う。食べてほしくない食べ物には名前を書く。など、その他色々あった。しかし、一番おもしろいと思っただのが、毎週日曜日の夜八時半から全員そろって、ゲームや音楽を楽しむ。というものである。とてもおもしろそう、趣味も楽しみも増えそうだと思ひ、正直ここ最近ないくらいワクワクしている。それから二日後、引越越しを終え、本格的に入居した。その日は祝日で、暇をしているのは俺と圭斗くんだけだったため、二人で分担して家事をした。そして、夜、小さな集会所が開催された。まず、全員の呼び名を決める。

「圭斗くんはそのままけいちゃんて良いかな。あと俺はあきらって呼び捨てが良いな。」

とあきらさんが言った。

「俺は何でも良いけど、よく呼ばれてるのは樫って呼び捨てか、幼いころは樫くんって呼ばれてたかな。樫って略しにくいから、あきらと同じく呼び捨てでいいや。」

「さて、問題は君だよ。奏馬くん。何か略したいんだけど…。まーくんってのはどうかな。奏馬の『ま』をのばしてまーくん。」

その略し方は初めてなので驚いたが、嫌ではなかったので、

「良いね。初めてそう呼ばれた。」

と言って笑ってみせた。

こうしてはじまったシェアハウス生活は今までにないほど順調だった。ルームメイトはとても親密で仲が良く、毎日が楽しい。まるで、神様が最後にくれた宝物のような生活だ。

最近分かったことは、けいちゃんが天然であることだ。よく忘れ物をしたり、物を探したりしている。でも、探し物は大抵すぐ近くにあつて、みんなで笑う。その時のけいちゃんは恥ずかしそう、とてもかわいひ。そして、もう一つ意外だったのが、樫はお酒を飲むと一気にテンションが上がり、おかしな事を言いだす。それに比べて、飲めそうなあきらは実際お酒に弱く、すぐに酔ひ、部屋に運ばれていく。そのような充実した日々が続く、一番楽しみにしていた日曜の八時半、俺たちは全員リビングに集まった。その日することは主にあきらが決めるらしい。今週はみんながトランプゲームをした。ババ抜きをしていて、けいちゃんの表情がとても分かりやすいので、けいちゃんから引く俺は、なんだか面白くて、何度も笑い出しそうになったが、本人は至って真剣なので、笑いを必死にこらえた。しかし、最期けいちゃんが負けたときに放った一言で、リビングが笑いにつつまれた。けいちゃんは、

「まーくん強すぎだよ。」

と言ったのだ。みんな一斉に、

「けいちゃんが弱すぎるんだよ。」

と言つて笑つた。こうして日曜日も楽しい一日として幕を下ろした。

俺の体に異変が起こつたのは、それから一か月後のことだった。やつと部屋の荷物も片付き、慣れてきたとき、急に目眩に襲われたのだ。幸いリビングで本を読んでいて、椿が夜勤から帰つてきた日のことだったので、すぐに救急車で運ばれ、病院に行くことができた。しかし、また二週間入院することになってしまった。俺に残された時間は、あと六ヶ月程度だ。そういえば、ありさちゃんは元気にしているだろうかと思ひ、あのテラスへ行つてみることにした。しかし、ありさちゃんの姿は見られなかった。元気になつて退院したのだろうかと思つたが、看護師さんに聞いてみると、今はベッドから起きられないほど容態が安定しないのだそうだ。心配になつて、ありさちゃんの病室へ行つてみることにした。病室に着くと奥のベッドでぬいぐるみと遊んでいるありさちゃんの姿があった。でも、その姿は前よりもはるかに痩せ、体には大量の管がつけられていた。とても痛々しく、話しかけ方に少し戸惑つたが、行つてみることにした。

「こんにちは。久しぶりだね、ありさちゃん。」

すると、ありさちゃんは表情をパツと明るくして、

「あ、奏馬お兄さん。すごく久しぶりだね。ありさ、ずっと待つてたんだよ。」

と言つた。俺のことを待つていてくれたのは正直うれしかったが、心配なので、

「ありさちゃんは元気にしてた？」

と聞いた。

「うん。そうだね。ありさね、なんか、ハツケツビョウっていう病気で、それを治すにはドナー？つていう人が必要なんだけど、ありさと合うドナーの人がいないから、手術ができないらしいの。」

そうだったのか。ありさちゃんはずつとドナーを待つていたのかと思ふと心が痛かつた。

「お兄さんは？元気にしてた？」

と聞かれたので、

「うん、お兄さんは元気だよ。」

と努めて笑顔で言つた。ありさちゃんとお別れをして、病室に戻つても、ドナーという言葉が頭から離れなかった。そして、はじめの方に考へていたENDINGプランを現実化してみようと思つた。ありさちゃんのような子にできることを自分なりにしようと思つた。しかし、俺にできることは何だろうか。残りの時間で何をしようと思つても、うまく思ひつかない。だから、退院してから、ルームメイトたちに相談しようと思ひ、その日は休むことにした。しかし、退院を待つことなく、次の日、けいちゃんが学校帰りにお見舞いに来てくれた。今までそんな人はいなかった。とてもうれしく思つた。そして、俺はドナーについての事を知つて限りで話した。ありさちゃんのことも話した。すると、けいちゃんは、

「俺、大学のサークルの人たちとか、友達にドナー登録すすめてみるよ。もちろん俺もする。」

と言つてくれた。ドナー登録を人にすすめることをプランの方針とし、この輪が広がっていけば役に立てるかもしれないと思つた。

そして、退院の日、ありさちゃんが生きていることを確認し、病院を出た。その日、あきららが迎えに来てくれて、車の中であきらにもドナーについて、けいちゃんに話したのと同じような話を話した。あきららは、

「そうか。そんなにドナー探しは大変なんだな。俺はもうドナー登録してるけど、改めて大切だと思へたよ。俺も会社の人とかに登録お願いしてみるよ。」

と言つてくれた。二人目にしてやつと計画が動き出した気がした。その後、椿にもお願いすると、快く引き受けてくれた。俺なりにも知り合いや数少ない友人に連絡を取つて頼んでみた。みんな優しく聞いてくれて、俺は人付き合いは多くなかつたけど、良い人に囲まれていたことを実感

した。

ある日、俺のもとに高校の同窓会のお知らせが届いた。良いチャンスだと思い、出席することに決めた。そして、同窓会当日とても久しぶりの改まった私服に腕を通した。最近あまりたくさん食べられなかったの、痩せたことを実感した。行ってみると、みんなと盛り上がり、とても楽しかった。そして、最後、俺は主催者に許可をとって、少しみんなの前でドナーについて話すことにした。

「僕は余命五ヶ月ほどで、その入院中にある幼い女の子に出会いました。その子は白血病で、苦しい入院生活をしています。はじめ出会ったときは元気そうでした。しかし、僕が二度目の入院をしたときは、体じゅうに管がたくさんつながれ、とても痛々しい状態でした。でも、その子はとても前向きで、元気になって友達と遊んだり、学校に通うことを夢みています。辛いこともさみしいことも頑張って乗り越えようとしています。僕はそんな姿に心動かされ、現在余りの人生をかけてドナー登録者の輪をつくろうとしています。もし、今の僕の話聞いて、少しでも興味をもってくれたなら、ドナー登録してほしいのです。病気で苦しんで、それでも必死に生きようとしている人たちの助けになってほしいのです。もちろん、ドナーになった場合、危険を伴うこともあります。でも、少しでも多くの方がドナーになることで人の命を救うことができます。だから、お願いです。みなさんの友人や家族、会社の人達にもすすめてみてほしいのです。よろしくお願いします。」

俺が話し終わると会場から拍手が上がった。一息にしゃべったので、息が上がっていたが、それよりも、みんなが最後まできいてくれて、温かく拍手してくれたことがうれしかった。それから同窓会はお開きとなった。後日、友人からメールが届いた。開いてみると、あの日会場にいた約八割の人が何らかの行動してくれたという内容がかかれていた。俺は最期に人の役に立つという目標が達成された気がして、うれしかった。

俺の余命が三ヶ月に迫った頃、体調が悪い日が続いていた。もしかしたら少し早めに逝くのかもな、と思っていたが、ルームメイトが側で支えてくれたおかげで、何とか前向きになることができた。そして、俺は八ヶ月が経っても奇跡的に生きていた。でも、その頃には、もう病室で寝たきりになっていた。そんなある日、俺のもとにうれしいニュースが届いた。ありさちゃんのドナーが見つかったのだそう。とてもうれしく思った。手術が成功すれば、あの子はきっと夢と希望にあふれた子になるだろうと思う。そして、数日後、また大きなニュースが届いた。けいちゃんがドナーになるそう。それが誰なのかは分からないが驚いた。ドナーとして選ばれるのは珍しいときいたので、けいちゃん自身が、一番驚いている様子だが、けいちゃんはそのことを誇りに思っていると言った。とてもうれしい。ドナーの輪をつくることで役に立ったことを実感できて、今までにない充実感を感じることができた。

ありさちゃんの手術はとも長い大変なものになったが、成功し元気になっていた。ありさちゃんは退院の日、俺のもとに来て、「お兄さん、ありさ元気になったよ。たくさんお話ししてくれてありがとう。ありさ、奏馬お兄さんみたいな大人になってみんなの役に立つからね。」

と言ってくれた。俺、尊敬される大人だろうか。でも、最後に人の役に立ったのは間違いないと思っている。だから、笑顔で

「元気だね。ずっと応援してるよ。」
と言った。

けいちゃんの手術も無事に終わり、病室に来てくれた。そのときにはもう俺はしゃべることもできなくなっていた。でも、来てくれた瞬間、笑顔で迎えた。安心した。元気そうだった。それから数日後、俺はルームメイトたちに見送られて短めだったが最後にとっても充実した人生に幕を下ろした。これが後悔のない俺の最高のENDINGプランだ。